

イタリア語における「*essere* + 形容詞」非定形補文について — 通時的文章コーパスを用いて —

上野 貴史

Takafumi UENO

1. はじめに

Cinque (1990) においては、語彙論的仮説 (Lexicalist Hypothesis) ¹⁾ という観点から、動詞と同様に形容詞にも非対格・非能格という区分が可能であるということを指摘している。この区分の基準の一つとして、Cinque (1990) では、「非定形補文における補文標識の選択」というものを挙げている ²⁾。

(1) a. non gli **era noto** *di* essere così famoso [Cinque (1990:23)]

not to-him was known to be so famous 「大変有名であることを彼は知らなかった」

b. mi è **impossibile** (**di*) aiutarti [Cinque (1990:23)]

to-me is impossible (to) help-you 「君を助けることは私には不可能である」

(1a) における形容詞 *noto* は非対格形容詞であるため、*di* の補文標識を必要とするが、(1b) のように、非能格形容詞とされる *impossibile* が *di* の補文標識を後続させると非文法的になり、非能格形容詞は ϕ -Inf (ゼロ不定詞) をとるということを Cinque (1990) では指摘している。同様に、非対格・非能格の区分があるという指摘は、Guasti (1991) においても見られる。しかし、Guasti (1991) では、これらの区分の基準として補文標識の選択に関しては触れていないが、(2) における形容詞 *impossibile* は、Guasti (1991) では、非対格形容詞として分類されている。

(2) a Gianni è stato **impossibile** arrivare a Roma in orario [Guasti (1991:325)]

to Gianni is been impossible arrive at Roma in time

「時間通りにローマに到着するのはジャンニには不可能だった」

このような、形容詞における二種類の区分が必要であるという立場に対して、Mirto (2008) では、Cinque (1990) で示された経験的証拠の検証を行い、すべての指摘に対して例外が認められるとして、非対格形容詞という存在を否定している。

(3) in una tale situazione, era **ovvio** (*?*di*) abbandonare la nave [Mirto (2008:14)]

in a such situation, was obvious (to) abandon the ship

「そのような状況では、船をあきらめることは明らかであった」

(3) における形容詞 *ovvio* は、Cinque (1990) によると非対格形容詞であり、補文標識 *di* が必要な形容詞となるが、(3) の場合、*di* を入れると文法性が下がることが Mirto (2008) では指摘されている。

一方、Salvi (1988) では、文において中心的な役割を果たす動詞の結合価によって基本文型を分類しているが、「*essere* + 形容詞」が後続する構造においては、形容詞が中心的な役割をするとして、構造上、非対格形容詞 (4) と「非対格でない形容詞」 (5) を分類している ³⁾。

- (4) a. [A][S]: è **possibile** *che* venga [Salvi(1988:70)]
 is possible that came.sbj,3sg. 「行くのは可能である」
 b. [A][S][PP]: gli è **impossibile** partire subito [Salvi(1988:70)]
 to-him is impossible depart soon 「すぐに出発することは彼には不可能である」
- (5) a. [NP][A][S]: Giovanni è **capace** *di* camminare sulle mani [Salvi(1988:70)]
 Giovanni is capable to walk on-the hands 「ジョヴァンニは手で歩くことができる」
 b. [NP][A][S][PP]: il conte era **riconoscente** a Elena *di* averlo accettato come amico
 the count was grateful to Elena to have-him accept as friend
 「伯爵はエーレナが友達として受け入れてくれたことを感謝していた」 [Salvi(1988:70)]

以上の各研究において、どの形容詞が非対格でどの形容詞が非能格として取り扱われているかを示したものが(6)となる。

- (6) a. 非対格形容詞
 i) Cinque (1990) [Mirto:2006]: certo/chiaro/esplicito/evidente/gradito/imminente/implicito/noto/oscuo/
 ovvio/prevedibile/probabile/sicuro/visibile
 ii) Guasti (1991): certo/chiaro/esplicito/evidente/famoso/gradito/imminente/implicito/impossibile/
 indispensabile/noto/oscuo/ovvio/probabile/sicuro/sufficiente
 iii) Salvi (1988): famoso/impossibile/possibile/sufficiente
- b. 非対格でない形容詞
 i) Cinque (1990) [Mirto:2006]: buono/brutto/deprecabile/fedele/impossibile/ingiustificato/ingiusto/libero/
 maggiorrenne/pericoloso/pertinente/possibile/riconoscente/sconosciuto/scostante/significativo/sorprendente
 ii) Guasti (1991): adatto/bello/eccellente/desideroso/difficile/disposto/facile/faticoso/impegnativo/incapace/
 indulgente/piacevole/riconoscente/saltuario/severo/simpatico
 iii) Salvi (1988): capace/fiero/grato/riconoscente

下線を引いた *possibile* と *impossibile* の分布が研究によって異なるが、それ以外は重なるところがない。また、*ne* の接語化の現象が認められるものと認められない形容詞が存在するということから、一部を除いてイタリア語形容詞には、非対格と非能格の二種類の形容詞の分布が存在するということが認められる。しかしながら、Cinque (1990) が指摘しているように、「非定形補文における補文標識の選択」がこの基準の一つであるということに関しては、議論の余地が残るところである。そこで本稿では、「非定形補文における補文標識の選択」というものに焦点を当て、「*essere* + 形容詞」に後続する補文の構造を明らかにすると共に、「補文標識の選択」は非対格形容詞の存在の基準ではなく、非対格・非能格というのは統語構造上の違いであることを明らかにしていく。さらに、この構造に後続する非定形補文に関して、*di*-Inf (*di* 付き不定詞) と \varnothing -Inf との揺れが近年まで確認される。

- (7) non sarebbe stato **necessario** *di* uscire dal letto tiepido [Serianni(1989:565)]
 not would-be been necessary to leave from-the bed lukewarm
 「生暖かいベッドから抜け出す必要はなかったのだろう」

Tomasi di Lampedusa の *Il Gattopardo* 『山猫』(1958) の中に、(7) のような形容詞 *necessario* の後に *di*-Inf が出現している例が Serianni (1989) で指摘されている。現代語では、この補文標識 *di* は不要であるが、

近年までこのような *di*-Inf と φ -Inf との揺れが確認できる。この点に関して、近代の文章コーパス⁴⁾を利用し、通時的側面からの数量的な考察から、補文標識の選択を分析し、非対格形容詞と非能格形容詞の統語上の構造と、補文標識 *di* の発達について明確にすることが本稿の目的となる。

2. 補文をとる形容詞

まず、「*essere* + 形容詞」に後続す

<表 1：非対格形容詞(CODIS Corpus)>

る補文に関して、どの形容詞が現代イタリア語で補文をとるかということを、現代コーパスを用いて、Cinque (1990) が示している非対格形容詞と非能格形容詞に分けてその出現の調査を行った。<表 1>は、非対格形容詞に後続する補文をその種類ごとに示したものである⁵⁾。非対格形容詞で、補文が全く出現しないのは、*esplicito/imminente/oscurol/visibile* となる。これら以外は、補文としての出現があるが、特徴的なのは *gradito*⁶⁾を除いて定形補文の割合が高いこと

形容詞	総数	<i>che</i>	φ -INF	<i>di</i> -INF	Inf	<i>che</i> +Inf	<i>che</i> /C	Inf/C
chiaro	755	148	0	0	0	148	100.0%	0.0%
evidente	923	232	0	0	0	232	100.0%	0.0%
implicito	172	9	0	0	0	9	100.0%	0.0%
noto	965	73	0	0	0	73	100.0%	0.0%
probabile	842	400	4	0	4	404	99.0%	1.0%
prevedibile	424	53	2	0	2	55	96.4%	3.6%
ovvio	792	259	14	0	14	273	94.9%	5.1%
certo	1000	46	0	6	6	52	88.5%	11.5%
sicuro	1000	131	4	58	62	193	68.2%	31.8%
gradito	607	1	10	0	10	11	9.1%	90.9%
esplicito	485	0	0	0	0	0	0.0%	0.0%
imminente	555	0	0	0	0	0	0.0%	0.0%
oscurol	619	0	0	0	0	0	0.0%	0.0%
visibile	591	0	0	0	0	0	0.0%	0.0%

である。定形補文のみで出現する

<表 2：非能格形容詞(CODIS Corpus)>

非対格形容詞は、*chiaro/evidente/implicito/noto* となっている。*chiaro/noto* に *di*-Inf が後続する例が Cinque (1990) で挙げられており、それが非対格形容詞の基準であるとしているが、今回のコーパス内では全く見られない。*di*-Inf は、*certo/sicuro* で出現するが、これらはすべて人称用法となっており、非能格構造としての出現となっている。また、*ovvio/prevedibile/probabile/sicuro* に出現する φ -Inf は非人称表現となっている。この非対格形容詞がとる補文をまとめたものが(8)となる。

形容詞	総数	<i>che</i>	φ -INF	<i>di</i> -INF	Inf	<i>che</i> +Inf	<i>che</i> /C	Inf/C
brutto	519	0	3	0	3	3	0.0%	100.0%
ingiustificato	254	0	3	0	3	3	0.0%	100.0%
libero	906	0	0	45	45	45	0.0%	100.0%
riconoscente	113	0	0	3	3	3	0.0%	100.0%
pericoloso	543	1	46	0	46	47	2.1%	97.9%
impossibile	793	27	188	0	188	215	12.6%	87.4%
ingiusto	359	5	33	0	33	38	13.2%	86.8%
possibile	1000	67	359	0	359	426	15.7%	84.3%
sorprendente	673	29	6	0	6	35	82.9%	17.1%
significativo	564	33	4	0	4	37	89.2%	10.8%
buono	943	1	0	0	0	1	100.0%	0.0%
deprecabile	66	1	0	0	0	1	100.0%	0.0%
fedele	902	0	0	0	0	0	0.0%	0.0%
maggiorenne	108	0	0	0	0	0	0.0%	0.0%
sconosciuto	896	0	0	0	0	0	0.0%	0.0%
scostante	67	0	0	0	0	0	0.0%	0.0%

- (8) a. 補文なし : *esplicito/imminente/oscuo/visibile*
 b. *che* のみ : *chiaro/evidente/implicito/noto*
 c. *chel di-Inf*: *certo*
 d. ϕ -Inf: *gradito/ovvio/prevedibile/probabile/sicuro*
 e. *chel di-Inf/ ϕ -Inf* : *sicuro*

次に、<表 2>の非能格形容詞においては、*fedele/maggiorenne/sconosciuto/scostante* では補文の出現が見られない。これら以外の形容詞においては、*significativo/sorprendente* を除いて、非定形補文での出現が多く見られる。また、*libero/riconoscente* における *di-Inf* は、人称構造となっている。このことから、一部の例外を除いて、非対格形容詞は定形補文が多く出現し、非能格形容詞は非定形補文においては、 ϕ -Inf で多く出現することが指摘できると思われる (9)。

- (9) a. 補文なし : *fedele/maggiorenne/sconosciuto/scostante*
 b. *che* のみ : *buono/deprecabile*⁷⁾
 c. *di-Inf* のみ: *libero/riconoscente*
 d. ϕ -Inf のみ: *brutto/ingiustificato*
 e. *chel ϕ -Inf*: *pericoloso/ingiusto/impossibile/possibile/sorprendente/significativo*

以上、非対格形容詞と非能格形容詞に分けて、数量的な調査を行ったが、非対格形容詞が定形補文、非能格形容詞が非定形補文を多用するという特徴以外、これらに差異が見られない。また、コーパス内で見られた *di-Inf* は、いずれも人称構造として使用されている非能格構造での出現となっており、Cinque (1990) が指摘する非対格形容詞の基準となる *di-Inf* は、本コーパスでは全く見られない。

3. 補文をとる形容詞の統語構造

3.1. 定形補文 (*che* 節)

形容詞に定形補文が後続するものには、人称構造 (10a) と非人称構造 (10b) の二種類のものがある。

- (10) a. *sono certo che lei non ha fatto niente di male* [NARRAT_2]
 am certain that she not has made nothing of bad 「私は彼女が何も悪いことをしていないと確信している」
 b. *non è certo che il presidente riesca ad avere il consenso degli alleati* [STAMPA_3]
 not is certain that the president succeed.sbj.3sg to have the consensus of-the allies
 「大統領が同盟国との同意に成功するか確実ではない」

(10a) のような人称構造として出現する形容詞には、*sicuro* と *certo* があり、この構造は (11) のように派生すると考えられる。

- (11) [_{TP} [_{DP} DP] [_T [_T] [_{VP} [_v [_v ϕ +essere] [_{VP} [_{DP} DP] [_v essere] [_{AP} [_A A] [_{CP} che]]]]]]]
-

(11) は、VP の主要部である *essere* が VP の主要部である ϕ に付加し、VP 内にある主語 DP が TP の指定部へ繰り上がっていることを示している。この構造を (12) のように、形容詞が一つの動詞のように機能し、補部としての *che* 節と、移動した主語 DP という構造として簡略して示すことにする。

(12) [TP [DP DP][VP [V *essere*-A][CP *che*]]]

(10b)については、これが非対格形容詞であるとする、(12)の明示的主語の代わりに(13)のような主語の位置に音形を持たない虚辞 *pro* が出現する非対格構造として記述できると考えられる。

(13) [TP [PRN *pro*][VP [V *essere*-A][CP *che*]]]

このような構造から派生するものとしては、*certo/sicuro* 以外に、非対格形容詞で *che* 節を出現させる *chiaro/evidente/implicito/noto/ovvio/prevedibile/probabile* がある。

一方、(14)のような非能格形容詞と位置づけられているものは、形容詞に区があるとすれば、(13)とは異なる構造から派生するものとなる。

(14) *è quindi ingiusto che* essa entri in possesso dell'eredità [PRACC_5]

is therefore unfair that she come.sbj.3sg into possession of-the-inheritance

「それゆえに彼女が遺産を手に入れるのは不公平である」

ここで、Moro(1997:174)が、"The finite clause following the quasi-copula is not its complement as is commonly assumed, but rather the subject of its complement, i.e. the subject of the small clause" と指摘しているように、定形節が小節構造の主語であるという考えに従って、(14)の派生を記述すると(15)のようになる。

(15) [TP [PRN *pro*][T T][VP [V [V ϕ +*essere*][VP [PRN *pro*][V *essere*][V [A A][SC [CP *che*][A A]]]]]]]

(15)の構造は、小節の述部である非能格形容詞が、VPの主要部に繰り上がることを示している。この構造を便宜上、形容詞の繰上がりが行われていない(16)のように示すことにする。

(16) [TP [PRN *pro*][VP [V *essere*][SC [CP *che*][AP A]]]]]

このように、非能格形容詞は小節の述部からの繰上げとなるため、*che* 節は非対格補部とはならず、非能格構造を形成すると考えられる。このような形容詞は、*ingiusto* 以外に、非能格形容詞で非定形補文をとる *impossibile/possibile/significativo/sorprendente* などがある。

3.2. 非定形補文 (*di*-Inf)

di-Inf に関しては、コーパス内では、(17)のような *certo/libero/sicuro* が人称構造として出現する。

(17) *ero sicuro di aver fatto centro* [NARRAT_3]

was sure to have made center 「私は言い当てたことを確信していた」

この(17)における、*di*-Inf は対格ではなく、斜格の「前置詞＋不定詞」の構造であると考えられる。このことは、(18)のように、*di*-Inf を接語化する場合、対格で受ける *lo* ではなく、斜格の *ne* で受けることから分かる。

(18) a. *ne ero sicuro*

of-it was sure 「私はそれを確信していた」

b. **lo ero sicuro*

it was sure 「私はそれを確信していた」

このことから、(17)の構造を、(19)のように記述することにする。

(19) [vp [DP DP] [v [v *essere*-A] [pp [p *di*] [vp Inf]]]]

これとは異なり、今回調査したコーパスには全く出現しなかったが、*di* を補文標識とした(20)のような非対格構造が文法的であるということが先行研究により確認されている。

(20) a. non mi era affatto chiaro di non poterlo prendere [Cinque(1990:23)]

not to-me was at-all clear to not can-it take

「それを取ることができないということが私には全く分からなかった」

b. non gli era del tutto evidente di non essere all'altezza del compito [Cinque(1990:23)]

not to-him was of-the all evident to not be to-height of-the task

「仕事に耐える能力がないことが彼には全く分からなかった」

このような、構造では experiencer (経験者) となる与格 (DAT) が義務項となっており、この統語構造は(21)のように派生すると思われる。

(21) [TP [PRN *pro*] [T T] [CP [PRN DAT] [v [v ϕ -essere] [VP [PRN *pro*] [v [v *essere*] [VP [PRN DAT] [AP [A A] [CP [c *di*] [TP [PRO] [T T] [vp Inf]]]]]]]]]

(21)の構造は、VP 内にある PRO をコントロールする与格が vP の指定部に移動していることを示している⁸⁾。この構造を簡略化して(22)のよう示すことにする。

(22) [TP [PRN *pro*] [vp [PRN DAT] [v [v *essere*-A] [CP [c *di*] [vp Inf]]]]]

このように、*di*-Inf の意味上の主語と与格の experiencer 項として、補文標識 *di* を用いる構造は文法的ではあるが、コーパスでの出現例がゼロであることから、それほど発達している構造ではないことが指摘できると思われる。しかし、この構造と類似したものが、 ϕ -Inf との揺れの中で近代コーパスには、*facile/difficile/giusto/impossibile/ingiusto/inutile/necessario/possibile/sufficiente/utile* という形容詞に見られる。この *di*-Inf と ϕ -Inf と使用割合を示したものが<グラフ 1>となる。1861-1900 年のコーパスでは *di*-Inf の出現が 14.0%、1901-1922 年のコーパスで 4.9%でその使用頻度は下がり、1923-1945 年のコーパスで 11.1%と少し使用頻度は上昇するが、現代に向けて徐々に消失していることが分かる。

このような *di*-Inf には、experiencer である与格を持つものと持たないものが見られる。

(23) a. era necessario di domandare del denaro all'Olivi (1923)

was necessary to ask some money to-the-Olivi 「オーヴィーにお金を要求する必要があった」

b. mi era impossibile di confortarlo (1923)

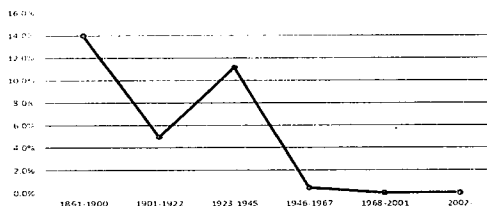
to-me was impossible to encourage-him 「私には彼を励ますことができなかった」

(23a)のような与格を持たないものは、現代語では補文標識 *di* のない ϕ -Inf として出現する構造と同じであり、(24)のように補文標識 *di* が導く補文を持つ非対格構造として記述できると思われる。

(24) [TP [PRN *pro*] [vp [v *essere*-A] [CP [c *di*] [TP [vp Inf]]]]]

しかし、このような与格のない(24)のような構造は、現代語では一般的ではなく、現代イタリア語においては、単独の補文標識 *di* が非対格補文または、構造上の主語となることができないということが指摘できると思われる。一方、(23b)の与格を持つ構造は、(22)の構造と同じものと考えられる。このような experiencer を持つ非対格構造は、1967 年までのデータの中で *impossibile*/

<グラフ 1 : *di*-Inf/ ϕ -Inf との交替⁹⁾>



possibile/facile/difficile/necessario/sufficiente において見られる。このような形容詞に関して、*di-Inf* 全体の中で与格が出現している割合を示したものが<表3>となる。形容詞によってその割合は異なるが、いずれにしても、*di-Inf* を補文

<表3 : *di-Inf* 中における与格の出現>

	<i>impossibile</i>	<i>possibile</i>	<i>facile</i>	<i>difficile</i>	<i>necessario</i>	<i>sufficiente</i>
1861-1900	60.9%	37.5%	44.4%	0.0%	12.5%	0.0%
1901-1922	20.0%	20.0%	25.0%	0.0%	10.5%	0.0%
1923-1945	25.0%	47.8%	71.9%	44.8%	0.0%	100.0%
1946-1967	100.0%	75.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%

3.3. 非定形補文(φ -Inf)

最後に、 φ -Inf を後続させて、非人称構造を作る構造に関してであるが、これについても(25)のように、非対格構造と小節構造の二種類の構造を想定することができる。

- (25) a. [_{TP} [_{PRN} *pro*]_{VP} [_V *essere*-A]_{CP} [_C φ]_{TP} [_{VP} Inf]]]
 non era **probabile** uscire da quella gabbia [NARRAT_7]
 not was probably leave from that cage 「あの檻から抜け出そうになかった」
 b. [_{TP} [_{PRN} *pro*]_{VP} [_V *essere*]_{SC} [_{DP} Inf]_{AP} A]]]
 è stato **ingiusto** vincere questa partita [STAMPA_20]
 is been unjust win this match 「この試合に勝つのは不当だった」

このような φ -Inf の二種類の構造が存在するという事は、Cinque(1990)が示した二種類の形容詞の存在と合致する。Cinque(1990)では、倒置主語の *ne* 接辞化を非対格形容詞と非能格形容詞の基準の一つとしているため、(26)のような非対格形容詞 *probabili* は、部分詞の *ne* 接語化を可能とする。

- (26) *ne* sono **probabili** ben poche (di dimissioni) [Cinque(1990:7)]
 of-them are likely really few (of resignations) 「本当にわずか(の辞職)だけがあり得そうだ」

しかし、(27)のような非能格形容詞 *ingiusta* は、*ne* 接語化することはできない。

- (27) **ne* sono **ingiuste** molte (di condanne) [Cinque(1990:7)]
 of-them are unjust many (of condemnations) 「(有罪判決の)多くは不当である」

このような *ne* 接語化は、Burzio(1986)によると、「構造的な目的語の位置からのみ可能」とされるもので、(26)のような非対格形容詞の後置主語は、構造的な目的語の位置、すなわち *probabili* の後ろにあることになるのに対して、*ingiusta* はそうではないということが言える。このことから、(25a)のような形容詞 *probabile* は、構造的な目的語の位置に φ -Inf の非定形補文を持っていると捉えることが可能となる一方で、(25b)の *ingiusto* は、小節構造の述部からの移動によるため、形容詞の構造的な目的語の位置に φ -Inf がなく、*ne* の接辞化が不可能な形容詞と考えることが可能となる。ここで問題となるのが、Mirto(2008)で指摘されている(28)のようなCinque(1990)で非能格形容詞とされる *possibile*

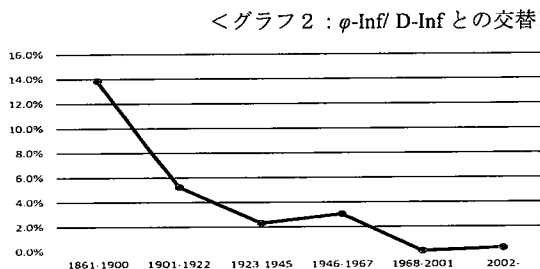
が *ne* の部分詞として接語化ができるという現象である。

- (28) di quelle soluzioni, *ne* erano **possibili** almeno un paio [Mirto (2008:12)]
 of those solutions, of-them were possible at least a pair
 「その解決法の内、少なくとも1組は可能であった」

このような *ne* 接語化に加えて、*possibile* と *impossibile* は、コーパスにおいても ϕ -Inf としての出現頻度が高く、また、Cinque (1990) 以外の先行研究では、非対格形容詞として分類されていることから、*possibile* と *impossibile* は、(25a) の非対格構造から派生していると考えるのが妥当であると思われる。

次に、 ϕ -Inf と類似した構造として、近代の通時的コーパスには、不定詞に定冠詞を付加して DP として形容詞に後続する形式 (D-Inf) が見られる。このような形容詞には、*facile/difficile/giusto/ingiusto/impossibile/inutile/necessario/ovvio/pericoloso/possibile/utile* のようなものがあり、 ϕ -Inf との揺れが確認される。〈グラフ 2〉は、非定形補文全

体における「定冠詞＋不定詞」の出現の割合を各形容詞で取り、その平均をグラフ化したものである。1861-1900 年では、「定冠詞＋不定詞」の出現が 13.8%、1901-1922 年では、5.2%、1923-1945 年では、2.3%、と徐々にその出現は減少



していることが分かる。このような例としては、(29) のようなものがある。

- (29) È **possibile** il prevederli? (1878)
 is possible the predict-them? 「それらを予測することは可能か?」

(29) は、不定詞の前に定冠詞を付加して、不定詞を名詞化することで、この文の主語であることを明示している。従って、この構造は、主語である「定冠詞＋不定詞」と述部である形容詞で小節構造を形成する (30) のような構造として記述できると思われる。

- (30) [_{VP} [_{PRN} *pro*] [_V [_V *essere*] [_{SC} [_{DP} [_D] [_{Inf}] [_{AP} **A**]]]]]

このような構造は、頻度的には少ないが、現代語でも保持している構造でもある。これに対して、現代コーパスで多く現れる (31) のような定冠詞のない構造は、小節構造ではなく、ゼロ補文標識が発達した非対格構造であり、この構造が現代イタリア語では一般的に使用されていることがコーパスからの結果から分かる。

- (31) sarà **possibile** prevedere gli sviluppi futuri [PRGAMM_1]
 will-be possible predict the development future 「未来の発達を予測することが可能であろう」

4. 結語

以上のことから、各構造にどのような形容詞が出現するかをまとめると (32) のようになる¹⁰⁾。

- (32) a) 定形補文 (*che* 節)

- i) [_{TP} [_{DP} DP] [_{VP} [_V *essere*-A] [_{CP} *che*]]]] : certo/sicuro

- ii) $[_{TP} [_{PRN} \textit{pro}] [_{VP} [_{V} \textit{essere-A}] [_{CP} \textit{che}]]]]$ (非対格構造) : **certo/chiaro/evidente/implicito/impossibile/noto/ovvio/possibile/prevedibile/probabile/sicuro**
- iii) $[_{TP} [_{PRN} \textit{pro}] [_{VP} [_{V} \textit{essere}] [_{SC} [_{CP} \textit{che}] [_{AP} \textit{A}]]]]]$: **ingiusto/significativo/sorprendente**
- b) 非定形補文 (di -Inf)
- i) $[_{TP} [_{DP} \textit{DP}] [_{VP} [_{V} \textit{essere-A}] [_{PP} [_{P} \textit{di}] [_{VP} \textit{Inf}]]]]]$: **certo/libero/sicuro**
- ii) $[_{TP} [_{PRN} \textit{pro}] [_{VP} [_{PRN} \textit{DAT}] [_{V} [_{V} \textit{essere-A}] [_{CP} \textit{di}] [_{TP} [_{VP} \textit{Inf}]]]]]]]$ (非対格構造) : **chiaro/evidente/noto**
- c) 非定形補文 (φ -Inf)
- i) $[_{TP} [_{PRN} \textit{pro}] [_{VP} [_{V} \textit{essere-A}] [_{CP} [_{C} \varphi] [_{TP} [_{VP} \textit{Inf}]]]]]]]$ (非対格構造) : **impossibile/ovvio/prevedibile/possibile/probabile/sicuro**
- ii) $[_{TP} [_{PRN} \textit{pro}] [_{VP} [_{V} \textit{essere}] [_{SC} [_{DP} \textit{Inf}] [_{AP} \textit{A}]]]]]]]$: **brutto/ingiustificato/ingiusto/pericoloso/significativo/sorprendente**

Cinque (1990) が非対格形容詞の特性としてあげている補文標識 *di* の選択が (32bi) に相当すると考えられるが、今回収集したコーパスには全く出現せず、出現頻度が低い発達していない形式であると言える。また、非能格形容詞の特性として φ -Inf というものを Cinque (1990) では挙げているが、(32ci) にあるような *ovvio/prevedibile/probabile/sicuro* という非対格形容詞は、逆にゼロ不定詞として出現するという結果となっている。このことから、非対格形容詞の基準として、補文標識の選択は、有効なものとはなっていないということが指摘できると思われる。結論としては、統語構造上、非対格構造に出現するものが非対格形容詞になり、小節構造で出現するものが非能格形容詞となると考えられる。従って、(32aii)、(32bii)、(32ci) の非対格構造に出現する形容詞が非対格形容詞ということになる。

さらに、ラテン語に存在しなかった補文標識 *di* という形式については、イタリア語で通時的に発達し、対格や斜格としての補文としては現在まで十分確立しているものであると言える。しかしながら、主格や非対格における補文標識としては、通時的に揺れが確認されるものの、現代イタリア語ではまだ十分に確立していないということが指摘できると思われる。

註

* 本稿は、日本ロマンス語学会第 54 回大会 (九州大学 2016 年 5 月 22 日) において、「イタリア語における「繫辞+形容詞」非定形補文について」と題して口頭発表したものを加筆・修正したものである。また、国立音楽大学の Alda Nannini 先生に、イタリア語に関するご助言を多く頂いたことに深謝いたします。

- Chomsky (1970) における \bar{X} 理論では、すべての句範疇が同じ内部構造を持つという条件を強いることから、形態的に関係する動詞、名詞、形容詞といった範疇は一つのものとしてレキシコンに表出されるという立場。
- 非対格形容詞と非能格形容詞に関して、Cinque (1990) での指摘をまとめると下記の表のようになる。

	非能格形容詞	非対格形容詞
倒置主語からの <i>ne</i> 接辞化	許さない	許す
倒置文主語からの <i>wh</i> 抽出	不可能	可能
主語への (短距離) 照応束縛	許さない	許す
主語による長距離照応束縛	許す	許さない
<i>come</i> 節	不可能	可能
補文標識選択	φ	<i>di</i>

- Salvi (1988) において示されているものの中で、補文をとる構造だけを示している。
- コーパスについては、Università di Bologna で作成された 1861-2001 年を①のような 5 つの時代区分に分割した DiaCORIS Corpus と、約 1 億語からなる 2002 年以降の②で示した CODIS Corpus を使用することにする。

① DiaCORIS Corpus: a. 1861-1900 b. 1901-1922 c. 1923-1945 d. 1946-1967 e. 1986-2001

② CODIS Corpus: 2002-

DiaCORIS Corpus からの用例には、その出現年を示し、CODIS Corpus については、その用例のレジスター、[NARRAT]:「小説・物語」、[STAMPA]:「新聞・雑誌」、[PRACC]:「学術的な散文」、[PRGAMM]:「法律・行政の散文」を示すことにする。

5) 例えば、形容詞 *sicuro* では、総数 1000 例中、定形補文(*che*)が 131 例、 ϕ -Inf が 4 例、*di*-Inf が 58 例、非定形補文の合計が 62 例、補文としての合計が 193 例、全補文中の定形補文の割合が 68.2%、非定形補文の割合が 31.8%であることを示している。

6) *gradito* は義務的な与格を必要とし、動詞 *piacere* と同じような構造となる。

7) *buono* と *deprecabile* については、補文としての出現が 1 例であるため、分析の対象外とする。

8) 与格が主語位置にあることに関しては、Belletti & Rizzi(1988)を参照のこと。

9) <グラフ 1>は、非定形補文全体における *di*-Inf の出現の割合を各形容詞で行い、その平均をグラフ化したものである。

10) 下線を引いているのが Cinque(1990)で指摘されている非対格形容詞である。

参考文献:

Belletti, Adriana & Luigi Rizzi (1988) "Psych-Verbs and θ -Theory," *Natural Language and Linguistic Theory* 6, 291-352.

Burzio, Luigi (1986) *Italian Syntax: A Government-Binding Approach*, Springer.

Chomsky, Noam (1970) "Remarks on Nominalization," in R. Jacobs and P. Rosenbaum (eds.), *Readings in English Transformational Grammar*, Ginn & Co., 184-221.

Cinque, Guglielmo (1990) "Ergative Adjectives and the Lexicalist Hypothesis," *Natural Language and Linguistic Theory* 8, 1-39.

Guasti, Maria Teresa (1991) "La struttura interna del sintagma aggettivale," in L. Renzi e G. Salvi (eds.) *Grande grammatica italiana di consultazione Vol. 2: I sintagmi verbale, aggettivale, avverbiale. La subordinazione*, Il Mulino, 321-340.

Mirto, Ignazio Mauro (2008) "Aggettivi e valenza in italiano," *ÉCHO DES ÉTUDES ROMANES, Vol. IV (2)*, 5-21.

Moro, Andrea (1997) *The Raising of Predicates: Predicative Noun Phrases and the Theory of Clause Structure*, Cambridge University Press.

Moro, Andrea (2000) *Dynamic Antisymmetry*, The MIT Press.

Radford, Andrew (2004) *English Syntax: An Introduction*, Cambridge University Press.

Salvi, Giampaolo (1988) "La frase semplice," in Lorenzo Renzi (ed.), *Grande grammatica italiana di consultazione Vol. 1: La frase. I sintagmi nominale e preposizionale*, Il Mulino, 29-113.

Serianni, Luca (1989) *Grammatica Italiana: Italiano comune e lingua letteraria*, UTET Libreria.

Ueno, Takafumi (2016) "The Diachronic Shift of the Complementizer *che* in Italian: The Finite Complement Sentence of the Verbs *sembrare* and *parere*," *NIDABA, No.45*, 1-10.

上野貴史 (2010) 「過去分詞の統語機能と派生語」, 『イタリア学会誌』, 第 60 号, 89-110.

上野貴史 (2014) 「小節構造における不定詞補部: 再構造化構文における *di*-INF と ϕ -INF」, 『言語文化学会論集』, 第 43 号, 3-17.

上野貴史 (2015) 「イタリア語非対格自動詞補文の使用分布と統語構造」, 『広島大学大学院文学研究科論集』, 第 75 巻, 43-60.